

国立国語研究所学術情報リポジトリ

「八丈・島ことば調査のつどい」講演記録

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002412

「八丈・島ことば調査のつどい」講演記録

調査の最終日に島の方々へ向けて「八丈・島ことば調査のつどい」を開催した。そのときのポスターを次にあげる。



国立国語研究所セミナー(第6回八丈方言講座)

八丈・島ことば調査のつどい

<プログラム>

1. 開会のことば
2. 教育長あいさつ
3. 国語研究所あいさつ
4. 八丈語の紹介(島ことばカルタ)
.....休憩.....
5. 八丈方言調査の報告「八丈のことば」

講演 「八丈方言の文法」

金田章宏(千葉大学教授)

「八丈方言の発音」

トマ・ペラル(フランス国立科学研究所常勤研究員)

「八丈方言と古代日本語」

平子達也(京都大学大学院博士後期課程/学振研究員)

パネルディスカッション

司会 木部暢子(国立国語研究所)

6. 閉会のことば

日時:平成24年9月9日(日)

13:30~16:00

場所:八丈町保健福祉センター



主催:国立国語研究所・八丈町教育委員会

プログラムの前半は「島ことばかるた」を使った5集落のことばの紹介、後半は八丈語に関する講演とパネルディスカッションである。後半の講演とディスカッションの記録を以下にあげておく。

~~~~~

(木部) それでは、第2部を始めたいと思います。第2部では、私たちが勉強したことを、ここで発表したいと思います。最初に千葉大学の金田先生、よろしくお願いします。(拍手)

(金田) 千葉大学の金田です。よろしくお願いします。私の方でご用意したのは、ホチキスで留めてある両面2枚のものです。私は以前から南海タイムスに書かせていただいたり、こちらに来ていろいろ話をさせていただいたりする中で、この八丈の方言というのは非常に古いんだと。あ、今日はですね、八丈方言ではなくて八丈語というのを使わせていただきます。今、危機「言語」の調査ということでやっていますので、八丈の言葉も八丈語というふうに呼びたいと思います。今までいろいろ、古いんだ、古いんだということを申し上げてきましたが、万葉集との関係でどういうところが八丈の言葉と共通しているかというのを、覚えていらっしゃる人はいますか。今日また新鮮な気持ちで聞いていただけますか。ということで、最初に少しおさらいをしたいと思います。

万葉集には奈良時代に詠まれた歌が4,500ぐらい入っていて、全部で20巻ありますけれども、14巻目と20巻目に、当時の関東周辺に住んでいた人たちが詠んだ歌がたくさん集められていて、第14巻が東歌、第20巻が防人歌という名前と呼ばれています。その東歌、防人歌と八丈語とで共通するところが、主につぎの4点です。

まず、動詞の「～する～」というときの形を連体形と言いますが、八丈だったら、「降る雨」と言わずに、「フロ雨」、あるいは「行くとき」と言わずに「イコとき」、あるいは「飲む酒」と言わずに「ノモ酒」、これは旧5カ村共通ですよ。その言い方は、この万葉集の14巻と20巻の中にそのままたくさん出てきます。2つだけ例を挙げておきました。

原文はもちろん、万葉集ですから漢字でぜんぶ書かれています。ふつうは意味が分かりやすいように、漢字と仮名を混ぜて書いて読んでいますけれども、今日は文庫本になっている万葉集の原文、これを白文といいますけれども、漢字だけのものを持ってきましたので、もしご覧になりたいかたがいらっしゃいましたら、あとでご覧になってください。

それを見ると、最初の歌ですけれども、「降ろ(布路)雪」というふうにあります。布と道路の路を書いて、フロというふうに読ませています。ふる雪(よき)。この「雪(よき)」というのも、この当時の関東周辺の人たちの方言的な、簡単に言うとなまりですね。方言的な音の違いです。

かみつけの <sup>よき</sup> 上野伊香保の嶺ろに降ろ(布路)雪の 行き過ぎかてぬ妹が家のあたり (14: 3423)

次の「行く先」というのも、「行こ(由古)先」というふうには、ちゃんと音が分かるように漢字で書かれています。万葉集の場合は、こういうふうには1音1文字で書かれている歌がたくさん

んありますが、そうではない、漢字の意味を使って短く書いた歌というものたくさんあります。ですけれども、とくに東歌、防人歌というのは、中央の発音と違うものですから、1文字1音という、元の音が分かりやすい書き方で書かれています。

行こ (由古) 先に波なとゑらひ <sup>しるへ</sup> 後方には子をと妻をと置きてとも来ぬ (20: 4385)

1つ目がこの動詞の連体形ですね。「フロ雨」, 「イコ時」, 「ノモ酒」。もう1つが形容詞の連体形です。八丈語だったら「アカケ花」, 「タカケ山」。これが万葉集だと、「悩ましけ人妻」, これは浮気之歌らしいんですけどね。あるいは2つ目の歌, 「かなしけ (可奈師家) 児ら」。島で今でも、「カナシイ」というのを「かわいい」という意味で使いますね。「カナシゴ」というので「かわいい子ども」というのをむかしは使っていたようなんですね。今の標準語の「悲しい」と違うんですね。で、万葉の時代の「かなしけ」というのも、もちろんその古い意味で使われているわけです。形も中央だったら「かなしき」になるところが、「かなしけ」というふうに八丈と同じ形で出てきます。

悩ましけ (奈夜麻思家) 人妻かもよ 漕ぐ舟の忘れはせなな いや思ひ増すに (14: 3557)

かみつけのくろほ <sup>ざか</sup>  
上毛野久路保の嶺ろの葛葉がた かなしけ (可奈師家) 児らにいや離り来も (14: 3412)

もう1つ、八丈語だと「飲んだ」というときに「ノマラ」, 「行った」というときに「イカラ」, 字を「書いた」というのは「カカラ」という言い方がありますがけれども、これが非常に古い形です。中学とか高校で、「つ・ぬ・たり・り」なんていうのをやったのを覚えていらっしゃる？ 「つ・ぬ・たり・り」, 意味は忘れていても、その音の連続だけは覚えていらっしゃるかもしれません。問題は「たり・り」の「り」の形です。その「たり・り」の「たり」の形の「飲みたり」というのが現代語の「飲んだ」に変わるんですが、この「たり・り」の「り」のほう、「飲む」だと「飲めり」というのが奈良時代まではあったんですが、平安時代以降になるとなくなるんです。それが、八丈ではいまでもそのまま使われています。

で、万葉集の例だと、「夕占にも今夜と告らろ (乃良路)」, この「のる」は占いをするという意味で、占いの結果が出るんですね。思っている人が今夜来ると占いに出たのに、なぜか来ないのかという、この「告らろ」というところがその形です。この「告らろ」のうしろに「ノモワ」の「ワ」をくっつけると、「飲む」だと「ノマロ」に「ワ」をくっつけると融合して「飲んだ」の意味の「ノマラ」になる、これと同じ形ですね。これがそのまま残っています。

ゆふけ <sup>こよひ</sup> の <sup>せ</sup> <sup>こよひ</sup>  
夕占にも今夜と告らろ (乃良路) 我が背なは あぜそも今夜よし来まさぬ (14: 3469)

次のが「青柳のはらろ (波良路) 川門」。これは柳の芽が膨らんでいるという「張る」, 「膨らむ」。これも「膨らんでいる」という意味で、この「はらろ」という形が出てきています。こういう、「つ・ぬ・たり・り」の「り」の系列が残っているというのは、本当に非常に古い文法現

象なんですね。

青柳のはらろ (波良路) 川門に汝を待つと <sup>せみど</sup> 清水は汲まず <sup>どなら</sup> 立ち処平すも (14: 3546)

最後が、「何々だろう」に当たる推量の言い方で、これは三根の発音だと「飲むノウワ」。さつき、音を伸ばすとか伸ばさないとか、ありましたけれども、これが大賀郷だと「飲むノーフ」になります。樫立、中之郷だと「飲むヌーフ」になりますかね、「ヌ」に近いような。新しい発音だと「飲むノーフ」になるんですけども、かなり古い発音だと「飲むヌーフ」のような発音がありました。

この「ノウ」のところ、「ノウ」だけ見るとよく分からないんですが、これをさかのぼっていくと、万葉集の最初の例だと「我をか待つなも」、「私を持っているんだろうか」という、この「なも」のところなんですね。この「だろう」に当たる「なも」の音が変化して、八丈語では「ノウワ」とか「ノウジャ」とかいう形で出てきているということです。最後の例もおなじように、「児らは逢はなも」が「逢うだろう」。

比多瀧の磯のわかめの立ち乱え 我をか待つなも (麻都那毛) <sup>きそ</sup> 昨夜も今夜も (14: 3563)

<sup>かみつけのおど</sup> <sup>たどり</sup> 上毛野乎度の多杼里が川路にも 児らは逢はなも (安波奈毛) ひとりのみして (14: 3405)

奈良時代の奈良というのは当時の中央なわけですけども、当時の関東周辺というのは、いわゆる田舎。今でもそうですけれども、中央よりは周辺のほうに古い言葉が残っています。当時もやはり奈良中央よりも周辺のほうに古い言葉が残っている。奈良時代の言葉の使い方がちゃんと分かっているのは、中央以外では関東周辺の言葉だけなんですね。つまり万葉集の東歌とか防人歌というふうな形で残されていたから、それがわかるわけです。まさに今、八丈語を使える皆さんというのは、その奈良時代の関東周辺の人たちの言葉をかなりの程度に受け継いでいる、非常に文化財的な方がたなわけですね。

以上が八丈語の非常に重要な文法的な特徴なんですけど、こういうことというのは、別に私が1人で勝手に言っているわけではなくて、かなり以前から、八丈語の特徴というのは非常に注目されてきています。今日は、これまでどういうふうに注目されてきたか、いつごろから注目されてきたかというのを、簡単に見ていただきたいと思います。

最初にご紹介するのが、120年以上前の外国人なんですね。アーネスト・サトウ、この人は非常に有名な人ですけども、この人とディケンズという人が八丈に来ました。言葉についても記録していますが、植物とか自然関係のものについても英語で論文を書いています。(1878: Dikins and Satow: "NOTES OF A VISIT TO HACHIJO IN 1878.")

で、言葉のところの、とくにその形容詞の「～け」という、その部分だけ原文を用意しました(省略)。このころから、八丈語と万葉集との関係というのがいろいろ指摘をされてきた。面白いのが、近藤富蔵の『八丈実記』なんですけども、2ページ目の上のところですね。『やた

『けの寝覚め草』の中に「ういでいわい」というのがあったんですね。ですが、今出版されている、簡単に見られる形になっている『やたけの寝覚め草』には「ういでいわい」はありません。近藤富蔵の『八丈実記』の中に載っているんですけども、このあたり、どういうことなのかというのはちょっと分からないんですが。

近藤富蔵とアーネスト・サトウたちというのは、一度島で会っています。おそらくそのときに、この「ういでいわい」というのを近藤富蔵が自分でどうも、読んできかされたか、話してきかされたかしているんじゃないかと思うんですね。それは、近藤富蔵の実記に入っている仮名漢字で書かれた「ういでいわい」の話よりも、アーネスト・サトウたちが書いたものの方が、発音が自然なんです。耳で聞いたものをたぶん書いたんじゃないかなと。それで、より方言的な表記で残されているんじゃないかと思います。

下の補足（省略）のところは、誤訳のせいで、サトウと富蔵が会ったのが1年ずれているというのをちょっと書いておきました。1977年ではなくて1978年に2人は会っています。

この時代、120年以上前ですけども、明治の初めのころというのは、ヨーロッパのほうからたくさん外国人の方が来まして、沖縄の方言を記録したチェンバレンはあれ何年ぐらいですか。チェンバレンという方も、琉球の方言を記録しているんですね。本格的な記録というのはその人が最初。で、私、高校が米沢なんですけれども、米沢にも外国人教師のダラスという人が行ってまして、米沢の方言を記録しています。このころは日本の各地で、そういう形で外国人が日本のいろいろな方言に注目していた、そういう時代だったと思います。

次にあらわれる重要な論文（「八丈島方言」『言語学雑誌』）というのが1900年ちょうど、保科孝一という人ですが、実際に八丈に来まして、2～3週間ぐらいですかね、八丈に来て論文を書いています。実はこの保科孝一という人は米沢の私の高校の大先輩だった、というのを後で知りました。

で、いろいろ細かいことを書いているんですけども、非常に大事なのが、当時の大衆小説、クニの方で出た本だと思うんですけども、それを八丈語に訳しているんです。小説ですから当然会話もたくさん出てきます。非常に面白いです。明治のころの、当時の八丈の言葉使いというのがよく分かります。非常に興味深いです。

このあと論文が何件かありまして、そのあと非常に大事なのが1948年の北条忠雄さんという方の論文（「八丈島方言の研究—特に上代性の遺存について—」『日本の言葉』、ほか）。この方は八丈には来ていないんですけども、いろいろな文献を調べて、万葉集との関係とか、今言われている八丈語の特徴というものをだいたい指摘しています。このころにはだいたい様子が見えてきたかなという感じです。

で、次が1950年の国語研究所の、先ほど紹介のありました、『八丈島の言語調査』ですね。ただこれは、単語とか音声、音韻というのが中心ですので、文法については、なくはないんですけども、ほとんどありません。ただデータの量は非常に豊富ですので、そういう点では参考になると思います。

次の2つ、星印を付けてありますけれども、これは八丈語の評価という点で非常に大事な論文ですので、後でコメントします。次の1959年の飯豊毅一さんの「八丈島方言の語法」（『国立国語研究所論集1 ことばの研究』）、これは1950年に出された国語研究所の報告書が、主に音声、音韻中心だとすると、こちらは、その調査をしたときの同じデータをもとにした、文法、語法についての論文なんです。これは八丈語の基本的な語形とか、その意味とかを非常にた

くさん載せています。もうこの段階で八丈語の文法に関する限り、基本的なところはかなり分かかってきている、そういう段階です。ですから、1949年の国語研究所の調査というのは、そういう点でも非常に大事だったということが言えると思います。

次にまた星印2つありますけれども、これも非常に大事な論文でして、前の2つと一緒に後でお話します。

最後のページ、このあたりになってやっと私が八丈に来始めまして、1990年のこれは一番最初に雑誌に載せた論文（「八丈島三根方言 動詞の形態論 アスペクトをめぐって」『国文学解釈と鑑賞』）です。このあといろいろあるんですけれども、これはいちばん最初なので、これだけ挙げておきました。奥山熊雄さん、昨日ホームに行ってお会いしてきましたけれども、お元気でした。ちょうど夕飯の直前で食堂にいらっしゃって、前よりも何だかお元気そうで安心しました。

これのあとは2000年の工藤真由美先生の論文（「八丈方言のアスペクト・テンス・ムード」『阪大日本語研究』12）とかですね。

で、熊雄さんから聞いた話をいろいろと整理して出したのが2001年の私の本（『八丈方言動詞の基礎研究』）で、この本は自力で立てるぐらいの厚さにやっとなりました。値段が高いので、お買いになる必要はまったくありません。

最後に、八丈語の評価ということですが、非常に大事だということが、今までどんな形で言われてきたか。まず1955年の金田一春彦さん（「日本語」『世界言語概説』下巻）、もう亡くなられたかたですが、八丈島の方言は、語法に著しい特色を有し、特色の幾つかは、全国の他のすべての方言に対して対立する」、ということをおっしゃっています。

その3年後の平山輝男さん（「青ヶ島方言の所属」『国学院雑誌』）。この方は音のほうがかたですが、八丈語を、東部、西部、九州とならぶ、4本柱の1区画として位置付けた。現地調査を行った研究者による区画であることに大きな意味があります。

で、この10年後ですね、服部四郎さん（「八丈島方言について」『ことばの宇宙』11）。このかたが非常に興味深いことを言っているらしいです。東歌とか防人歌のことをさす東国方言、万葉集に出てくるものですね。東国方言が非日本祖語的な特徴を保存しているという可能性です。非日本祖語的な特徴ということは、日本語の古いものと別の系統です。このあたりを私は、もしかしたら縄文系では、というふうに言っているんですが、まあ、それはちょっと言い過ぎかもしれませんけれども。そういう可能性に以前から注目していて、「残存的特徴を含む非日本祖語的特徴を、少なくとも現代の東日本の諸方言に見出すことが、長い間私の関心事の1つであった」といいます。その土台にあるのは、「東歌・防人歌の東国方言と日本祖語との分岐の年代は、現在の近畿方言と琉球方言の分岐年代よりも古い、という仮説」です。まあ、一般に琉球方言が一番古いといわれているんですけれども、それよりも前に分かれたんじゃないか、という仮説なんですね。

服部さんはこの年に八丈島にいらっしゃって、「予想通り「八丈島方言は東歌東国方言の系統をひく非日本祖語的方言が現在の（日本祖語系の）本州東部方言の同化的影響を著しく受けつつ成立したもので、まだいくたの非日本語的特徴を保存している」という仮説を支持すると見做し得る資料が得られた」と書いています。形容詞の「け」とか、動詞の「お」とかですね、これは非常に古いんだということを言っているわけです。この「非日本祖語的特徴」、非常に興味深い表現だと思います。

その後1971年になって、上村幸雄先生（「なぜ方言を研究するか」『教育国語』26）、私もお世話になっている先生なのですが、八丈語の重要性を強調しています。「八丈島の方言は、奈良時代の奈良の日本語よりもさらにふるいかもしれない要素をもちつづけてきた可能性があって、方言学的にみてたいへんに貴重な方言だといえるのである」と。この上村先生は、この時期にも国語研究所の調査があったんですね、前のよりは規模が小さいんですが。で、この調査を元にして、会話を文字にしたものを論文に発表していらっやいます。このときの国語研究所の調査に刺激されて、のちに方言集を出された大賀郷の浅沼良次先生が、あちこちの人の録音をたくさん取りました。それを私が全部いただいているんですけども、非常に貴重な記録になっています。そういうものの分析が進めば、今の皆さん方の八丈語と、何十年か前のとの比較ができるわけですね。ですから、これからどんどんいろいろなことがもっと分かってくると思います。

ということで、八丈語というのが、中の人から見るとなかなか、何がそんなに大事なんだみたいな、あまりにも普通すぎて、見えてないというのがあるのかもしれないんですけども、我々のようなよそから来たものにとっては、たいへん魅力的で興味深い、で、重要なものである、それが八丈語であるということが言えます。これからも、私なんかにできることというのは大してないんですけども、できる限り、精いっぱい、あんまり言っちゃうとだめなんですけどね、頑張りたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いします。（拍手）

（木部） どうもありがとうございました。では、2番目のお話。今回一番遠くから参加しています、フランス国立科学研究所のトマ・ペラル先生です。よろしくお願いします。（拍手）

（ペラル） はい、皆さんこんにちは。今回の調査に協力していただいて、また、今日はお忙しい中、ここに来てくださって本当にありがとうございます。僕は、金田先生から先ほど話があったように、八丈島だけではなく、いろいろな方言、日本語の古い特徴、八丈島の言葉がどれぐらい古いのかとか、そういう問題に興味があって、言葉の歴史を専門として研究しています。日本語がいつごろ日本列島に入ってきて、どういうふうに列島全体、本土、八丈、あと琉球列島に広まっていったかが僕の関心の、興味のあるところです。

今までは主に、琉球列島の言葉の研究をやってきました。なぜかという、先ほど金田先生がおっしゃったように、琉球の言葉には大変古い特徴が残されているからです。八丈島の言葉にもそういう古い特徴があるというのが以前から知られていて、それで、八丈島の方言にも大変興味があって、今回まいりました。

僕は、先生の資料にあったような万葉集の東歌とか防人歌の研究も少しやっています。そのときに八丈島の言葉にも同じようなものが残っていることを知りました。調査をしていてよく聞かれることは、——琉球でも、また今回八丈島でも、時々聞かれたんですけども——何でこの言葉はこんなに違うのか。明らかに共通語と違いますよね。単語の面でも発音の面でも文法の面でも、いろいろ違うんですけども、なぜ、そんなに違うのかという問題があって。で、まあ、やっぱり島というのが大きいですね。昔は飛行機もなかったし、船も遅くて頻繁に人が来ることもなかったので、島で、何か言葉が新しい言葉がはやると、それが島の外に広がることはありません。あとは人口も少ないので、だいたいみんな身内で、知り合いなので、新しい言葉が使われ始めると、それが全員に広がっていくんです。



逆に本土で起こった変化は、島にはなかなか届かないですね。あまり交流がないので。本土の人との交流も少なく、そういう新しいものがなかなか入ってこない時代がずっと、まあ、現代今まで続いてきたと思います。

島の言葉もちろん、昔から少しずつ変わってきています。それと同時に本土でもいろいろ変化が起こっていますが、交流がないので、それぞれ別の変化が起こったりして、だんだん分岐して姿が変わってきます。そういうことがあって、八丈島、琉球もそうですが、非常に本土の言葉とは異なる状態になってきたかと思います。

今回の調査で、いくつか面白いことに気が付きました。先ほど言ったように、ぼくはずっと琉球の言葉の研究をやってきましたが、八丈のことは琉球の言葉と似ているところがたくさんあります。まずは、やはり島という環境が、同じ「黒潮文化圏」といわれて、環境が非常に似ているんですけども、言葉も共通点がいくつかあって、それが非常に面白かったです。

じゃあ、なぜ八丈島の言葉と琉球の言葉に共通点があるのか、何で似ているのかというのを考えると、理由は場合によって、3つの説明が考えられると思います。

まず、1つ目は、後で実際の例をいくつか見ていきますが、偶然、ただの偶然、たまたま似ているだけ、そういう例も、少しはあります。2番目は、借用。どっちかがもう片方の言葉を借りたというような場合。それはしかし、八丈島と琉球の島の間には交流があんまりなかったんじゃないかなと思いますので、その可能性は低いかなと思います。3つ目は、それが古い形だという説明です。本土ではなくなったが、八丈と琉球には残っているということです。

まず、ただの偶然の類似を紹介していきます。今回の調査では「庭」のことを八丈島のことばで「にゃー」と言うことがわかりました。この「にゃー」という語形は、琉球でもあちこちの島に見られます。でもよく考えてみたら、「にわ」から「にゃー」に変わるのそんなに難しいことじゃなくて、わりと自然な変化だと思います。言語の変化には、変わりやすいもの、自然な変化というものがあって、あちこちで同じ変化が起こったりします。この場合も「にわ」が「にゃー」になるのは、非常に自然な変化ですから、ただの偶然だと思います。

同じように、「皮」のことを「縄」のことを「かわ」とか「なわ」じゃなくて「こう」とか「のう」とか言います。母音[a]のところ[o]になっている単語がいくつかあったんですけども、例えば、奄美の言葉にも同じような語形があります。「皮」を「こう」とか、「縄」を「のう」とかいうのが、[awa]という連続が[oo]になることはごく自然な変化で、たまたま、奄美でも八丈でも同じ変化が起こっただけだと思っています。

次は、「きょう（今日）」のことを、集落によって違うそうですが、「きい」というところもあるそうです。僕が長い間、研究してきた宮古の大神島（おおがみじま）という方言でも、まったく同じく、「今日」のことを「きい」と言います。発音がまったく同じなんですけれども、両方ともやはり「きょう」という発音が元で、たまたま同じ発音に変わっただけかと思います。

偶然の例の最後に、「涙」のことをこちらでは「めなだ」と言うそうですが、沖縄、奄美でも「涙」のことを「なだ」、または「みいなだ」といいます。「めのなみだ（目の涙）」というのが語源だと思うんですけども、「なみだ」から「なだ」になるのは母音が落ちて、涙が「なんだ」になって、それが「なだ」に短くなっただけかと思います。これもそんなに起こりにくい変化ではないので、たまたま2つの遠く離れている地域で変化が起こっただけだと思っています。

次に、本土ではなくなったが、八丈と琉球には残っている例、現代の共通語などにはないが、非常に古い文献、さっきの話の万葉集とか古事記とか、そういう古い文献には出ているものの

例をいくつか紹介していきます。

まずは、「地面」のことをこちらでは「みじゃ」と言います。琉球でも似たような言葉があつて、「にちゃ」とか「んちゃ」とか「んた」とか言います。島によって発音が異なるんですけども、もともと同じ言葉だと思えます。これはおそらく、文献にもたぶん出ていません。奈良時代の文献にも出ていないし、現代の本土のどの方言にも、どうもなさそうです。じゃあ、なぜ八丈島と琉球にあるのか、考えてみましょう。

この場合、たまたま「にちゃ」という言葉が生まれて、たまたまそれが土を指す言葉になったというのは、なかなか考えにくいですね。やっぱり、もともと非常に古い言葉だったのですが、本土からなくなり、八丈と琉球には残ったというふうには考えられるかと思えます。

それから、本土の言葉で「この・その・あの」というのがありますが、こちらでは、「この・その・うぬ」ですよ。「う」で始まる単語が出てきて、彼のことも「うれ」と言ったりしますよね。これはもちろん、本土にはないんですけども、琉球にはあります。意味が若干ずれていて、遠くにあるものを指すんじゃなくて、だいたい、相手の方を指すんですけども、「うり」とか「うぬ」とかと言います。古代語にも現代語にもないですが、非常に古いと思えます。

それから、「頭」のことを八丈島では「つぶり」と言いますが、琉球でもあちこちで、「つぶり」といいます。現代語の「あたま」というのは、実は新しい言葉で、もっと古い平安時代の文献には、頭のことを「つむり」という人がいるというふうには書いてあります。共通語でも、普段は「あたま」と言うんですけども、例えば「おつむ」と言ったりして、それは同じ言葉で、やっぱり頭を指す非常に古い言葉でしょう。

さらに、自分のことを「あれ」とか「あい」、「あが」と言いますよね、八丈島では。琉球でも自分のことを「ああ」、「あぬ」とか「あが」と言います。これは現代語では使いませんが、古代語では自分のことを「あれ」とか「あ」と言っていました。やはりこれも、現代語、本土の方言ではなくなった言い方ですが、八丈と琉球には残っています。

さらにいくつか例を取り上げてみますと、そうですね、物を数えるときは、現代語では、例えば「ひとつ」で、人を数えるときは「ひとり」、どちらの場合でも、「ひとつ」、「ひとり」で、最初のところが同じ「ひと」ですが、八丈島では、1人は「とり」、なのに1つの場合は「とつ」じゃなくて、「てつ」ですよ。母音が違っているのが非常に興味深いです。琉球でも、いろいろ変化しているんですけども、もともとは、なぜか「つ」の前だけ「ひと」じゃなくて「ひて」に当たる発音だったというふうには考えられています。実は、平安時代の文献にも、そうですね、地方だったかな、俗に「ひとつ」じゃなくて「ひてつ」という人もいたというふうには書いてあります。これもやはり、もともとそういう、ちょっと変わった言い方、なぜか「つ」の前だけでは「ひと」じゃなくて「ひて」だった、というのが非常に古い特徴だというふうには考えています。

そのほかに、「ミミズ」のことを「メメズ」または「メメズメ」と言いますが、琉球でも「メメズ」。「ミミ」じゃなくて。母音が[e]になっています。これは、八丈島や琉球で「ミミズ」が「メメズ」に変わったのではなくて、もともと「メメズ」だったのが、本土で「ミミズ」になったというのが適切かと思えます。要するに、八丈島の言葉がなまったのではなくて、共通語の方がなまっています。

同じく、「魚」のことを「よ」と言いますが、琉球でもだいたい「ゆー」とか「いゆ」とか、そういう発音です。これも、日本語の「うお」、「飛び魚」「太刀魚」の「うお」に対応する言葉

ですが、現代では「うお」ですが、もともとは「いよ」、古代語では「いを」という発音です。それが、八丈島ではちょっと短くなって「よ」になったんです。これも本土の方が大きく変わって「いを」から「うお」になった。これも、本土の方がなまっています。

八丈島の言葉と琉球の言葉に共通する部分には、奈良時代よりも古い日本語の特徴を保っているところがたくさんあります。ただ、八丈島の言葉の全部が古いというわけではなく、やはり、八丈の言葉もいろいろ変化していて、おそらく、江戸時代からいろいろな言葉が入ってきたかと思います。例えば、「だれ」という言い方、「誰ですか」の「誰」ですけれども、この「誰」というのは、古代語では「たれ」と濁ってなかったんですけども、濁るようになったのが平安時代以降で、それは新しい特徴です。または、「どこ」という、場所を聞く言葉もわりと新しい言い方です。相手のことを「お前」とか「おみ」という言葉も、それは新しい言い方なのではないかと思います。そういうふうと考えてみますと、非常に古い特徴があると同時に、古代語にはなく、後の時代に発達してきた特徴も重なっているというのが非常に面白くて……。

僕が考えている仮説としては、もともと古い、非常に古い言葉、まさに金田先生が話したような、奈良時代以前の古い言葉が八丈島に入ってきて、それで非常に古い特徴が今でも残っているんですけども、その後、江戸時代になって、たくさんの方が流されてきて、その人たちが自分の言葉を持ってきた。その中にやはり身分の高い人もいたので、八丈島の方は、身分の高い人の言葉をまねて、自分たちの言葉に江戸の人の言葉を取り入れた。さらに、現代では本土の共通語も入ってきて、それがさらに上に重なって、今の八丈島の言葉ができたのではないかというふうに思っております。以上、ありがとうございました。(拍手)

(木部) どうもありがとうございました。はい、では3人目です。我々のグループでは若きホープ、京都大学大学院博士後期課程の平子さん、お願いします。

(平子) あんまりはじっこでしゃべっても何なので、ここで話させていただきます。京都から来ました平子といいます。皆さんこんにちは。どうぞよろしくお願いします。(拍手)

じゃあ、ちょっと座らせていただきます。僕は、もともと、大学院に進んだときには京都の方言をうつしたと思われる、平安時代とか奈良時代の文献資料を使って、古い日本語の姿を研究していました。その後、研究を進めていく中で、いろいろな方言の中に古代の日本語と共通しているところが少し見られる。特に前々から、八丈の言葉には興味を持っていました。金田先生の話にもありましたように、八丈とか琉球には、万葉集との共通点、万葉集の東歌との共通点とか、トマさんからありましたけれども、平安時代の文献に載っていて、本土、いわゆる共通語では使われてない言葉とかがいろいろあるわけです。

僕は文献をやっていたときから、アクセントというものに興味を持ってやっていた。八丈にはいろいろな報告があるんですけども、アクセントで単語を区別することがない、例えば、「お箸」の「はし」と、川にかかっている「はし」と、「端っこ」の「はし」とをアクセントによってあんまり区別をしないというふうにいわれています。

けれども、先ほどカルタを読んでいるのを聞いていたりですとか、今回の調査で聞いてみたりして、集落によってイントネーションというんですか、何かこう、抑揚というのはだいぶ違うんだなというふうに感じました。で、どういうふうに違うのかというのは、これからの僕たちにとっての課題なのだと思います。

その話は今回はできませんが、古代日本語と八丈語ということでお題をいただいたので、それでお話をさせていただきたいと思います。今回のカルタの中に、もう何個かそういう単語が出てきました。例えば、今日いただいたA3の紙の「え」のところに、「エビズルは 昔は よく食べたもんだよ」という共通語があります。その最初に出てきます「えべず」という形です。おそらく「エビズル」とかそういう形から変化をしてきたんだと思います。古代の辞書とか、そういう文献を見ても、「エビ」という形で「ブドウ」を指すというふうに書かれています。

この「エビズル」とか、植物に対して「エビ」のような単語を使うというのは、それなりに古い言葉が残っているんだらうなというふうに思いました。例えば、三根では「えべずは むかしは よく かもうもんだら」というふうに、「食べる」というのを「かむ」と言いますね。本土の方で「かむ」というのを使って「食べる」ということを意味することはありません。これも古代の、例えば『源氏物語』とか、そういう文献には、「かむ」というので食べるというのを意味します。これも、八丈語に残っている古代の言葉の一つだと思います。

その次に、お茶碗のことを「ごき（御器）」ということがあると思います。現代の言葉に「ごき」、共通語に「ごき」そのものが残っているわけではありませんけれども、このカルタにあります「ごきぶり」の「ごき」というのは、お茶碗のことを指しています。「ごきぶり」の語源は「ごきかぶり」、「お茶碗をかぶる」に当たります。昔、百科事典を書いた人が、「ごきかぶり」と書くべきところを、「ごきぶり」と間違えて書いてしまって、それが今、共通語で広まって「ごきぶり」と呼ばれているわけです。

今の八丈の方言では、「ごきぶり」のことを「かきじゃるめ」とか「かきじゃりめ」というふうに言うんですね。「ごき」という言葉は、ものすごく古い文献ですと出てきますけれども、今では「ごきぶり」という単語の中に、痕跡的に残っているに過ぎません。例えば「ごき」は、平安時代の文献に、『讃岐典侍日記』という日記の中に「ごきなくて」というふうにあります。

平安時代よりも少し古い文献と八丈の言葉で共通するなと思って報告を聞いてみますと、まあ、ちょっと汚い話になるかもしれませんが、「にっとうまる」という言い方、「まる」とかいう言い方があります。これはあの、大便とか便をすることですよね。これは、実は『古事記』の中に「くそまりちらしき」というふうな形、「まり」という形で出てきます。もしかしたら、琉球とか、そっちの方にも出てきたりするのかもしれませんが。ものすごく古い言葉ですよ。ちょっととりとめのない話になってきましたけれども……。

また、カルタの、「朝早く畑に行ったんだけど」という中で「とんめて」とか「とんめてい」とかいう単語が出てきました。これは、皆さんよくご存じの『枕草子』の中に出てきます。「春はあけぼの」という中で、その同じ段のところで「冬はつとめて」。「冬は早朝がいい」というふうな言い方で出てきます。この「つとめて」という単語が変化したのがカルタの中に出てくる「とんめて」とか「とんめてい」という形になります。琉球の方にもあるんですかね。ちょっと僕は琉球の方は分かりませんので、トマさんに……。

(ペラール) ありまーす。

(平子) はい、あるそうです。こんなふうに、古代の文献、八丈、そして琉球と、共通している単語というのがまあまあ見られます。

ほかにも、「めならべ」という言葉、一般に女の人のことですかね、女の子ですかね、若い人ですかね、僕が調査したときには、25歳までぐらいしか言わないというふうに、言われたんですけれども、これも『源氏物語』の中で、「めのわらわべ」とか、「めのわらべ」というふうな形で出てきます。琉球の方に同じような単語があります。「めら」とかいう単語、「めえらび」というような言葉が出てきます。非常に古い言葉の1つだと思います。

僕が1つ非常に気になったのは、「しょけ」という単語です。「何か知っているか」というときに、「しょけか」というふうに聞きますよね。これは、古代の「しろし」とか「しるし」という単語にさかのぼるんだと思います。「し」に「ら、り、る、れ、ろ」が続いたときに、「しょ」とか「しゃ」というように音が変わります。例えば、「シラミ」のことを「しゃんめ」と言いますよね。「し」の後に「ら」が続いて「しゃ」になる。他に、「白髪」のことを「しゃが」と言います。これも「し」の後に「ら」が続いていて、それが「しゃ」になった。「しろし」の場合は「しょ」になる。これは同じ音の変化の仕方をしていて、もともと「しろし」だったんだなということが分かる単語です。「しろし」は万葉集にも出てくる単語です。

今日、僕の前にお話をしてくださった金田先生とトマさんと一緒に調査したときに、この「しょけか」という形が出てきました。ちょっと複雑な話になるかもしれませんが、「しょけ」というのは形容詞で、動詞ではないんです。「赤い」とかいう語と同じ系列になります。標準語では「知っている」というのは動詞ですが、八丈では形容詞です。それなのに、「うにゃ このよのなめよ しょけか (お前はこの魚の名前を知ってるか)」の「なめよ (名前を)」のように、その前に標準語の「を」に当たる形が出てきます。「赤い」「赤きゃ」とかの前に「よ」というのはあんまり来ないですよ。「このリンゴよ赤きゃ」とかいうふうな言い方をしないと思うんです。ですから、「しょけか」という単語は八丈特有の使い方をしているのかなというふうに思いました。

あともう1つ、古代語の特徴をしっかりと残しているんだなと思ったのは、「人がいる」ということを「人がある」と言うことです。「孫が去年から国にあるじゃ」という文が調査の中に出てきて、「孫がある」という言い方をします。共通語では、生きているものに対しては「いる」ではなくて「ある」を使います。生きているものに対して「いる」を使うようになるのは、非常に新しく、文献で調べる限りでは18世紀、19世紀ぐらいのことです。八丈はそれ以前の形を残して使っているわけです。

こんなふうに、古い言葉が残っていて、僕ら、古代の文献を使って日本語の歴史を勉強している人間にとって、こういう経験はとても大事です。例えば、僕がこの調査に参加せずに、今回調査されたものを読んで、「ああ、こういう言葉が八丈にもあるのか」と単に感じているだけではだめです。文献をやっている人間も、生で方言に接しますと、本当に「ああ、生きた言葉として昔もたぶん使われていたんだらうな」というのが非常に実感できます。

例えば、先ほどの金田先生の話にあった、形容詞の連体形の形ですとかも、報告書では知っていたけれども、今回ここに来て初めて、本当に話しているのに接して、文献で書かれていた言葉も本当にこうやって使われていたんだなと、ひしひしと感ずることができました。

単に、古い言葉が残っていて、珍しいとかそういうことで終わらせるのは本当にもったいないことだと思います。それを記録して、研究をして、例えば今、トマさんが話されたみたいに、八丈語というのがどういうふうな成立のしかたをしてきたのか、それがひいては日本語、日本全体の言葉の成り立ちとか関係の研究につながっていくと思いますし、できれば、いろいろな

方にそういうことを少しでもいいので、興味を持っていただきたいというふうな考えでいます。

僕は八丈の言葉を今回初めて聞いて、非常に興味深く聞きました。いろいろなところに方言調査に行っていますけれども、またここにもやってきたいなというふうに思います。ちょっと早いですけれども、これで終わりたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

(木部) ありがとうございます。あと少し時間が少しありますので、何かご質問があれば、この機会ですから、ぜひお聞きください。はい、じゃあ、そこの方。

(Q1) 八丈島に来てからですね、地名の読み方なんですけれども、普通は、今こっちは大賀郷(おおかごう)というところを、本土の人の読み方だったら「おおがごう」って言います。また、檜立のことを「かしだて」って、つい読んでしまいます。八丈島は内地で濁音で言うような地名が濁音になってない読み方をするとところが多いんですけれども、それは何か理由があるんでしょうか。

(木部) 私も金田先生に叱られました。「かしだて」と言ったら、違うと。濁音と正音は、非常に難しく、地域によっても違います。例えば、八丈の地名に護神(ごしん)というのがありますね。「ごじん」じゃなくて「ごしん」。私は九州の出身ですが、「神社」を「じんしゃ」という地域が九州には広く広がっています。「じんじゃ」と濁らないんですね。それから、食べ物のオクラ。八丈のオクラは非常に立派ですね。八丈語でオクラは何て言うんでしたっけ。

(会場から) ネリ。

(木部) ネリ。あの、ネリのことを九州ではオグラと言うんです、鹿児島では。あっ、これは濁りますから逆ですね。濁ると澄むは、なかなか難しいところがあるんです。八丈は、澄むのが多い。まあ、それがなぜかはちょっと今後の課題にさせていただきたいと思います。じゃあ、ほかにどなたかいらっしゃいませんか。

(Q2) ここ最近なんですけど、韓国の時代劇とかに興味がありまして、古代朝鮮時代に七支刀というのがあって、おそらく奈良、平安の時代かと思うんですが、一時期、日本と仲の良い時代があったようです。そのとき交流があったとすると、まあ、韓国というか日本から見たら外国の言葉の影響もあったかと思うんですけれども。自分のおふくろが檜立出身で、自分は今、大賀郷で三根出身になるんですけれども、その檜立の言葉を聞いたときに、韓国のその、意思表示というか、感嘆符というか、それに似ていると感じました。島ことばで言うと「あいこいがの まったく」といったようなときの表現が大変似ているように感じるんですが。そういったほかの国からの影響とか、その、言葉とか言語とか、そういうものは何かあるんでしょうか。それとも、その、今日のお話にあったような、八丈語のルーツというか、そういったものがあるって、それによって今の八丈のことばができているととらえられるんでしょうか。その点、いかがでしょうか。

(金田) えー、非常に難しい問題でして、実際にはそういうふうな、日本の古い方言と、ほ

かの近いところの言語との関係がどうだったかというのは、まさにこれから研究されていくんだと思います。今までは、八丈語がどういうものだったかというのも、よく分からなかったわけですね。何十年か前までは所属不明の方言だというふうにも言われていたわけです。当時は研究者がそういうふうにもうお手上げの状態だったわけです。

ですから、日本語の中のいろいろな言語、マイナー言語がだんだん分かってくれば、かつ近隣の、例えば韓国だったら韓国のいろいろな方言ですね、特に南の方。そういうところの方言の実態が分かってくれば、比べることができるようになる。同じ程度に詳しく分かっていたら、同じ程度の比較ができる。日本の中だけでなく、韓国など近いところと比較するというのはこれからの大きな課題だと思います。

(木部) はい、ありがとうございます。もうお一方ぐらい時間がありそうですが、いかがでしょう。あつ、はい。

(Q3) すみません。あの、方言と言いますけれども、要するに男女とありますよね。住む場所も違っている男と女が結婚して、その中でまあ、お互いにしゃべることばも違うことがありますよね。そうすると、方言がどんどん途絶えていくということが考えられるんですが。要するに混じり、混じり合ってしまうわけですね。その辺は、これから先の研究では、どういうふう考えられるんでしょう。

(金田) 混ざるのはしょうがないですよ。三根の人と檜立の人が結婚して、話をするというわけにいかないですから。それはそういうふうにも、混ざったものとして、客観的にとらえるしかないと思います。しょうがないです。

(木部) 昔と違って、人の交流が非常に盛んになりましたから。また、遠くの人とも交流したり、お嫁さんが遠くから来たり、こちらからもお嫁に行ったり。時代の流れでこれは仕方のないことですね。ですから、方言も今までの話であったように、古いまま化石的にずっと変わらないわけではなくて、時代の流れの中で変わりながら、外からの影響も受けながら、今の方言がある、今の八丈語があるわけです。琉球の言葉もそうですし、どこも同じです。だから、方言が変わるといのは当たり前なことだと思います。でも、その中で古いものも残っていくことがある。それはとっても大事なことだとお考えいただければいいんじゃないかと思います。それでは、どうも長い時間ありがとうございました。(拍手)

